

## 教職大学院Newsletter 85

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻教職大学院Ne wsletter編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/10239">http://hdl.handle.net/10098/10239</a>

# 教職大学院

## Newsletter No. 85

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4 2016.5.30

### マネジメントリーダーを育てる

福井大学教職大学院 教授 三田村 彰

私は教育委員会勤務時代に、管理職研修を見直すため、学校改革に取り組んできた多くの管理職とインタビューする機会を得ました。

たとえば、まだグローバル化という言葉が聞き慣れない30年前に、全国に先駆けて国際科を中心とした高等学校の特色作りに取り組んだ管理職、生徒の基礎学力不足に問題を抱える中学校で、地域の小学校と連携し授業改善に取り組んだ管理職、総合的な学習の時間が導入される以前から、小学校に探求型のカリキュラムを取り入れ子どもたちの主体的な学びの場を保障した管理職など、すばらしい成果をあげている方々に出会いました。

このような学校改革にすばらしい成果をあげている管理職には、いくつかの共通する能力があることに気づかされます。

第一に、管理職になる前から学校が抱える課題を広い視野から検討する経験を積み重ね、学校の現状を客観的に分析する力を持っていること、第二に、学校改革に向けた情報や理論を必要に応じて組み合わせ、常識にとらわれず柔軟に発想する力を持っていること、第三に、学校改革に向けた理念や構想を、教職員や保護者のみならず地域住民とも共有し協働して改革を推し進める力を持っていることです。

このような成果をあげることができる管理職を育てるためには、管理職になってからの研修だけでは不十分です。管理職になるため

の養成研修や管理職選考方法などを総合的に見直す必要があります。

これらも踏まえ、福井大学教職大学院では管理職になることを前提に入学する「学校改革マネジメントコース」を本年4月から新設しました。

このコースの特徴は、院生が所属する学校の抱えるマネジメント課題について、各学校の校長にも参加いただきながら、学校改革のビジョンや改革を進める学校組織作り、改革に伴う危機管理にも注意を向けつつ、実践し議論を重ねていくものです。

すでに、市町の教育長や各学校の校長ともヒアリングを進めており、たとえば、アクティブ・ラーニングなど新しい学習方法を取り入れた学力向上への取り組み、地域と連携した学校行事のあり方、若手教員の指導力向上に向けた組織作りなど、各学校の抱えるマネジメント課題が共有されています。院生は、これらの課題に対して学校現場で様々な実践に取り組み、月間カンファレンスでは、幼稚

#### 目次

- 巻頭言(1, 2)
- スタッフ紹介(2~4)
- 院生紹介(5~9)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告(10~14)
- 4月合同カンファレンスに参加して(14~16)
- 平成28年度教員免許更新講習について(17, 18)
- 研究紀要・実践報告書紹介(18~20)
- 書籍紹介(20)
- 研究会案内(21~23)
- お知らせ(24)

園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の校種や年齢等のライフステージの違いを超えて議論を積み重ね、自校の実践を客観的に分析する力を育てます。さらに、集中講座では、優れた実践報告や理論書を読み解き、自校の課題解決に必要な実践や理論を再構築する力を育てていきます。

また、6月に行われる実践研究福井ラウンドテーブルでは、Zone B「教師教育」で「学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能

力を問う」と題して、これからの組織マネジメントのあり方やマネジメントリーダーに求められるもの、またマネジメントリーダーの養成について本学教職大学院の取り組みや教員養成系大学における教師教育改革とマネジメント、企業経営等から見えてくるマネジメントと学校の課題などを議論していく予定です。6月ラウンドテーブルの詳細は前号のNewsletter No.84に掲載しておりますので、お読みいただき、ぜひご参加下さい。

## スタッフ紹介



### 新井 豊吉

はじめまして。

4月から教育研究科に赴任しました新井と申します。3月で東京の学校を定年退職し、はじ

めて福井で暮らすことになりました。生まれは青森県の三沢市です。わたしと同じ年代の方は三沢高校の太田幸司投手を思い出すかもしれません。また文学好きな方は寺山修司を思い出すかもしれません。大学から東京にでてきてそのまま東京で就職しました。学生時代は自閉症児への行動療法を学んでいました。その後、小学校の特別支援学級、私立知的障害養護学校で小学部から高等部専攻科までの児童・生徒の担任を務めました。その後盲学校小学部の重度重複学級、公立の肢体不自由養護学校、知的障害特別支援学校で担任を勤めました。盲学校では体験学習の大切さを感じました。肢体不自由養護学校時代には今まで学んできた教育とかなり違うので戸惑いましたが一念発起し、摂食指導や機能訓練を学び、自立活動教員の免許を取得しました。そうすると今まで見えてこなかった子ども達の微かな筋肉の緩みなどバイタルサインを感じることができるようになり、見とりを実感し

### あらい とよきち

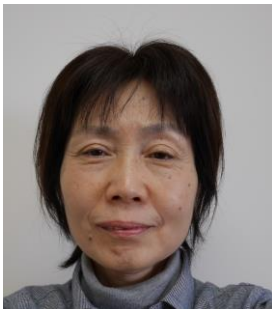
ました。その後、研究主任として新設の知的障害特別支援学校の立ち上げに関わり、その学校に8年間勤務しました。そこでどうも学校において子どもたちは個々の能力にあった支援を受けているのだろうか、行き過ぎた指導を受けているのではないだろうか、という疑問がわいてきました。肢体不自由校での経験がそのように感じさせたのかもしれませんが。自閉症ならパニックが起きて当然とか、たまには力による強い指導も必要なのだという考えになじめませんでした。そこで3年間、東京都内の全知的障害養護学校33校に対して体罰に関する聞き取り調査を行いそのデータをもって東京学芸大学大学院教育学研究科に進学しました。毎日、仕事を一時間休みをとり、会議ではわたしが関わっている議題が一番最初にもってきてもらうようにし、大学院の5限、6限を二年間一度も休まずに授業に参加し、働きながら大学院を修了しました。大学院では知的障害養護学校における体罰に関する研究で修士論文を書きました。聞き取り調査やアンケート調査から時おりマスコミで報道される体罰は氷山の一角であり、これでいいのかと思いながら働いている教員がたくさん存在することがわかりました。また対象となってしまう子どもたちは発達障害をもつ子ども達

が多いということもわかりました。この研究は自分自身の拙い実践を見つめなおすとともに、心ならずも行きすぎた指導を行っている同僚にも迫る形になりました。つらい時期もありましたが自分は一体誰のために働いているのかということを一に考え信念を曲げずに研究と実践を続けました。最初は遠巻きに見ていた人たちも年月が経つにしたがって少しずつ一緒に考えてくれる仲間が増えました。

最後は東京の都心から離れたところにある知的障害特別支援学校で6年間高等部の学年主任を勤めました。いままではどちらかというと重度の遅れをもつ子ども達と過ごすことが多かったのですが、ここでは知的に遅れない、または軽度の遅れがある生徒達と触れあうことになりました。ここではじめて、言葉や行動で教員をやりこめる生徒達と真っ向から取り組むことになりました。生徒から暴力を振るわれたり授業が崩壊したりするなどして異動していく教員もいました。この6年間の経験はわたしにとって本当に大きなものでした。彼ら一人一人を見ると同時に、彼らだけを指導しても根本的には変わらず家族支援が必要だということに気がきました。そこから地域の施設や児童相談所、子ども家庭支援センターとも密接に関わるようになりました。

教員と生徒という関係だけではなく地域を巻き込んだ環境が大切でした。母子家庭で発達障害をもつ、荒れていた生徒から「とよっちー（わたしのこと）ならお母さんと結婚しても良い」と言われたこともありました。警察に捕まり警察署や裁判所につきそったこともありました。みんな卒業し自分なりに働いていることに「育ちなおし」としての学校の役割を痛感します。同時に東京ならではの問題もありました。みんながみんな順調にキャリアを積むわけではありません。東京は誘惑の多いところ。20代のなった卒業生たちも遊びたいし結婚もしたいです。ホストに騙されてお金が払えず風俗で働く寸前だった子を探しまわったこともありました。いじめなどに苦しんできた生徒達は、大事にされる言葉にとっても弱い側面があります。わたしは都心で開かれる風俗問題を考えるセックスワーカーサミットに出たり、風テラス（風俗で働く女性たちに開かれる無料の生活・法律相談）やLGBT（性的少数者）の問題にも関心をもったりするようになりました。実践をするなかで取り組む問題は目の前に現れてきます。今度も多数派のなかに埋もれてしまう人たちに目を向けて行きたいと思っています。

よろしくをお願いします。



## 荒木 良子

4月1日付けで着任いたしました荒木良子と申します。附属学園併任として仕事をしていくことになりました。よろしくお願ひいたします。仕事で出会った方たちのことをお話し、自己紹介に代えたいと思います。

私は新採用から28年間、盲学校に勤務し、そこで子どもさん、保護者さん、先生方に出会って教師になっていく道を歩きました。幼

## あらき よしこ

稚部から高等部まですべての担任を経験し、係わった子どもさんの障害状況も多様で、多くの経験を一つの学校の中ですることができました。今から15年前のことです。ある保護者さんとの語らいの中で「教師になったばかりの頃は、視覚障害について何もわかっていなかった。ほんとに申し訳ないと思う。それなのに生徒さんたちがわたしを先生として尊重してくれた。」と言うと、彼女は「先生はわかろうとしていたから、生徒さんたちは待つことができたんだと思う。障害があると周りの人から分かって貰えない経験を山のよ

うにするから、わかろうとする人に対しては待てるんだ。」と言いました。思いがけない言葉にぼろぼろと涙がこぼれました。26年前のことです。強く希望してある中学生の男の子の担任になりました。その子どもさん、保護者さんと国立特殊教育総合研究所（現・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）で開催された合宿に参加しました。研究所の先生方とその子どもさんとのかかわり合いの姿に心打たれ、私は次第に怖くなりました。もっと素晴らしい先生に出会えるはずだったのに、私が希望したためにその可能性を閉じてしまったのではないか…。それから懸命に向き合いましたが、その思いは消えません。ある時「私でなければ、もっと可能性が広がったかも知れないのに。」とお母さんにポツンと言うと、彼女はこう言うてくれました。「もしかしたら、そうかも知れない。でも、〇〇（子どもさんの名前）が先生の方が好きなんだからそれでいい。」さらに30年前のことです。社会科の教員として中学生の全盲の男の子たち3名と地理の学習をしました。彼らは地図の理解が難しく、図版を作り直し、時には寄宿舎に乗り込んで夜まで学習しましたが、なかなかうまくいきません。そんなときに一人が言ったのです。「先生がこんなに一生懸命に教えてくれるのに、わからないということは、僕たちは本当にだめなんですね。」なんということだ、そんな思いをさせてしまった。見えないこと、触ってわかるということ、彼らの理解の仕方、何にもわかっていないのは私、ダメなのは私の方。その後、私は触察することについて学び直し、お互いがわかることから再スタートしました。

盲学校の特徴として全国の学校のほとんどに創始者がいます。後に公立移管しますが、自分たちの教育は自分たちがなさねばならないという歴史を私は誇らしく思いました。盲学校は福井県には1校だけなので、学ぶためには他県に出向くこととなります。近畿圏、東京に頻繁に出かけました。そんな時に、視覚障害教育は先輩たちが作ってきて、我々が

受け継いでいくんだと言うプライドとミッションを他県の先生方から強く感じ、優れた仲間たちの端に加わり、私もその一人となって一筋にこの仕事を深めていきたいと考えるようになりました。

しかし、わたしは盲学校に就職したのではなくて福井県の教員として採用されたのでした。盲学校一筋なんて叶わぬことでした。異動した先は南越特別支援学校。そこでの7年間に私はチーム協働という大きな財産を得ることができました。在宅訪問対象児の担任となり、子どもさんを中心に保護者、看護師、教師がチームになっていく過程にワクワクし、チームとして働くことの意義を考えることができました。そのことが一方で地域支援としての相談活動（幼稚園、保育園、小学校へ出向いて先生方や保護者さんのご相談に応ずる）を繰り返していったのです。市教委、福祉関係者、保健師、療育関係者などなど多くの人と顔が見える関係になり「チーム〇〇ちゃん」になっていく過程で、子どもとわたしたちかかわり手が育ち合うことを何度も経験することができました。南越地区で自分は何ができるかと考えるようになった頃に退職の年齢が迫り、そして、教職大学院へと踏み出す機会を得ることになりました。

私の未熟さを少しも責めず成長を待ってくれた生徒さんたちや保護者さんたちに、本物のプライドと強いミッションをもって働くことを身をもって示してくれ先生方に、チーム協働の経験を通して知り合った南越地区の多くの方たちに、育てられて、今の自分がいます。着任後の4月初初は何もできない自分にどんどん自己肯定感が下がっていきましたが、今、これまでを振り返ったとき、こんなにたくさんの方が自分の中にあるのだから、自分にできる何かを見つけて、これまで通り、真摯に目の前にことに向き合っていこうと思うようになりました。自己紹介と言いつつ、自分で自分を励ますものとなりました。ありがとうございます。そして改めてどうぞよろしく願いいたします。

## 院生紹介



### 森 裕美子 もり ゆみこ（敦賀市立威新小学校）

こんにちは。今年度、ミドルリーダー養成コースに入学しました森裕美子と申します。現在、敦賀市立威新小学校に勤務しています。今年度で本校に勤務して6年目になります。本校は全校児童90名、教職員12名と規模は小さいです。しかし、素直で明るく元気な子どもたちと豊かな自然環境の中、いろいろな活動に取り組んでいます。また教職員も、新採用の先生から経験のある年配の先生方まで学級指導や教科指導、生徒指導に至るまで、お互いに思いを伝えながら日々の教育活動に取り組み、多くの刺激を受けながら自分にできることを探し一生懸命取り組んで来ました。

そんな中、学校の中でも大きな校務分掌をもつことも増え、周りの先生方を支えたり、学校を支えたりする力が必要だと思ふようになりました。また、自分が支えてもらう側から支える側になる年代になってきたことも感じ始めました。

そんなことを漠然と考えてきたときに、教職大学院へのお話を伺いました。何か変わらなければ、どうすればよいのかと考えていたときにいただいたお話だったので、「自分に必要なことなのかもしれない」と感じました。しかし自分に本当に出来るのかどうか不安も大きかったのも事実です。そんなとき、教職大学院を出られた先輩方とお会いすることがあり、「新しい世界が広がるし、大きな経験になるよ。」とのお話を伺えたことで、受験を決意しました。

教職大学院では、様々な校種、立場の方とお話をする機会があります。4月の合同カン

ファレンスでも、他県の学校の先生、違う校種の先生方のこれまでの実践や教育への思いに触れることができました。自分と比較したり勤務している学校の様子と比較したりすることができとても刺激を受けました。また、長期実践報告を読み、先輩方の様々なことへの挑戦、悩みながらも進むべき方向性を探っている様子からも多くの気づきと発見をいただきました。教職専門性開発コースのみなさんとお話した時には、自分が教職を目指したときの気持ちや思いを振り返ることもできました。初めは不安でいっぱいだった合同カンファレンスでしたが、終わったときには、心の中に小さいながらも新しい光が見えたような感覚を覚え、充実した2日間を過ごすことができました。

本校は、小中一貫校に向けて具体的な取り組みを考えていく節目の時期を迎えています。今年度からは中学校校区の4校が力を合わせ、授業や研究を考えていくことが課題となります。小学校間の連携も工夫していくことになります。

「校区の子どもたちをどのような姿に育てるのか」決して簡単に進んでいくことではなく道のも険しいと思います。しかし、新しい枠組みの中で多くの方と関わり1つの方向性に向かっていくことが子どもたちの力を伸ばすこと、新しい可能性を開くことになると思います。私にできることは小さなことかもしれませんが、自分を変え、学校や同僚を支え、何より子どもたちの笑顔のために努力していこうと思います。

大学の先生方のご支援をいただきながら、大学院で一緒に学ぶ仲間と語り合い実践を積むことを楽しんでいけたらと思います。よろしく願いいたします。

## 志村 智恵美 しむら ちえみ (厚木市立清水小学校)

今年度教職大学院で学ばせていただくことになりました志村智恵美です。よろしくお願ひします。私は今、神奈川県厚木市立清水小学校に勤務しています。何故神奈川の人かと思われることでしょうか。東京や神奈川にもたくさん教職大学院があります。しかし私の学び方に合っていたのが、福井大学大学院だったということです。福井大学大学院を選んだ理由は3つあります。1つ目は、現職教員のまま、学校で学ぶことができるということでした。私の教職員生活もあと十数年になり、自分のしてきたことの方性は間違いないのか、また若い世代の仲間のためにできることは何かを考えるために、休職しなくて学ぶことのできる教職大学院を探していて、見つかったのが福井大学大学院でした。2つ目は勤務校を拠点として学ぶことができるということでした。私は今の勤務校で、たくさんの先輩方にたくさんの教えを受けて育ててもらいました。本校に赴任した8年前は、学年リーダーで一番年が下だったのに、今ではとうとう年の離れた一番上になってしまいました。先輩方に育てていただいたように、年の離れた後輩たちにできることは何なのかを考

え、即職場で結果につなげていくためには、拠点校方式で学ぶことができる大学院がよいのではないかと考え選びました。最後に3つ目は、今の日本の教育界を引っ張る福井県や秋田県の教育に興味があり、この県の学びの形を知りたいと考え福井の地に来ました。

初めて福井の地に降りた時、澄み渡っている空気、地元の方々のやさしいお話の仕方が、自分の心を浄化させ、故郷にもどったような優しい気分させてくれました。毎月この地に来るたびに、このような気持ちになることができると思うとうれしさと胸がいっぱいになります。今年は6年生の担任になり、忙しい中での大学院生の学びになります。しかしこのような年だからこそ、大学院での学びが、今自分の悩んでいることや、困っていることの助けになってくれると思っています。合同カンファレンスでのみなさんとの学び合いで、たくさんのことを気づかされ、考えさせられました。これからこの学びを大事にして、今の自分を振り返り、さらに成長していけるようがんばっていきたいと思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。



## 永曾 義子 ながそ のりこ

(奈良女子大学附属中等教育学校)

この度、福井大学教職大学院ミドルリーダー養成コースにお世話になります奈良女子大学附属中等教育学校の永曾義子と申します。福井大学との出会いは、昨年6月のラウンドテーブルでした。想像を絶する多くの人たちの熱意溢れる集会に驚き、また刺激を受けましたが、まさか自分もここにお世話になるとは、その時は夢にも思いませんでした。しかし今考えてみると、

ラウンドテーブルでは、本校の学校設定科目「コロキウム」の『人生幸福論』という講座の実践報告をさせていただきました。福井県は、まさにこのテーマにピッタリの地（日本一幸福感を感じている県であることや、自分の県に住んで働きたいと思っている県民性など）であることに何かご縁のようなものを感じたことは確かです。また、地域と学校とが連携し合い公民館活動が活発で、公民館から多くの方がラウンドテーブルに参加されてい

ることにも驚き、この地域との連携に何か福井県の子どもたちを育てる秘訣がありそうだと感じました。

教職大学院への出願の際に、これまでの自分自身の歩みをたどってみると、語り尽くせないほど実にさまざまな実践を経てきたことに気づかされました。中等教育学校の所属ではありますが、様々な取り組みの中で保育園児や幼稚園児たちとの交流、オープンスクールでの小学生への体験授業、大学への出講や教育実習生の指導、高齢者施設への訪問など、あらゆる世代の人たちと関わりながら、本校の自由な校風の中で、教師も自由に教材研究ができる恵まれた環境であることにも気づかされました。この教職大学院で学ぶという機会がなければ、自分自身の実践を振り返り、

それをまとめて多角的な視点から省察するようなことはなかったであろうと思います。このような機会を与えていただいたことに感謝して、今後益々要求されるであろう学校改革や教育の在り方・授業の進め方などを展望しつつ、微力ではありますが、次の世代へ何らかの形で貢献することができればいいなと考えています。ストレートマスターの方たちから見れば、私はもう教員生活も残りわずかとなり、今頃から何を研究するのかというような年齢になってしまいましたが、こんな私だからこそできることもあると自分に言い聞かせ、若い人たちのエネルギーをいっぱいもらって帰ろうと思っています。そして、福井県の温かい空気に触れてリフレッシュできそうな気がしています。これから2年間どうぞよろしく願いいたします。

## 森 匡史 もり まさふみ（カリタス女子中学高等学校）



教員になって10年。ご縁があって、この春から福井大学の教職大学院にお世話になることになりました。久しぶりに学生証を手にして、新鮮な気持ちでいっぱいです。どうぞよろしく願いします。

中高時代は理系で、将来はロボットや人工知能の研究をしたいと考えていましたが、大学で自分の人生を見つめ直し、人と関わる仕事に就きたいと考えるようになりました。当時、カトリックの教会で子どもと関わるボランティアをしていたこと、また母が教員だったことから、教職を志望するようになりました。

その後、教育学部と神学部で学び、10年前に現在の学校（カリタス女子中学高等学校）で教員生活をスタートさせました。教科は「カトリック倫理」と「社会」。校務分掌は「宗

教部」。「フットサル部」の顧問をしています。

これまで私が教員として大事にしてきたことは、カトリック教育の実践です。私は高校時代からカトリックの教会に通い始め、学生時代の終わりに洗礼を受けました。教員になりたいと考え始めたとき私の心にあったのは、「カトリックの学校で、カトリックの価値観（福音的価値観）に根差した人間教育に携わりたい」という想いでした。その想いを胸に、カトリック学校であるカリタスにおいて、自分なりの実践を積み重ねてきました。

現在、日本のカトリック学校は大きな課題を抱えています。修道者の減少、高齢化にともない、学校現場から修道者は姿を消しつつあります。信徒の教員も少なく、生徒の多くも信徒ではありません。そんな中、どのようにしてカトリック学校としてのアイデンティティを保っていくのか。何をもち、カトリック学校と言えるのだろうか。今、私たちが考えなければならないテーマです。



社会が大きく変化する中、カトリック学校はどう変わっていくべきなのか。社会のニーズに、カトリック学校としてどう応えていくのか。社会の変化や教育改革の動きを踏まえたうえで、新しいカトリック学校の在り方を考えていけたら良いと思います。



## 前田 菜里

今年度、ミドルリーダー養成コースに入学しました前田菜里と申します。どうぞよろしくお願い致します。

地元の短期大学を卒業後、平成25年度より認定こども園 福井佼成幼稚園で保育教諭として勤務しております。今年度で4年目になり、初めての5歳児担任となりました。保育者の道を進むきっかけになったのは、高校時代の担任の先生に“先生に向いているのではないか”と言われたからなのですが、短大入学後は本当に保育者になることを決めていませんでした。中学時代は、あまり学ぶことに対して積極的ではなく、それよりも体を動かすスポーツに情熱を傾けていましたが、短大での幼児教育分野だけは学ぶことを楽しいと感じ、学ぶことに対して前向きになれ自信を持つことが出来たので、保育者として働くことを決めました。

私には、子ども達が登園し、部屋に入ってきたときに心がけていることがあります。それは、一人ひとり目を見て挨拶し、よく来たね！という気持ちを込めてハイタッチをすることです。これは自園の園長も玄関でしていることですが、私も新任のころから続けています。（1年目は3歳児担任でしたので、ギュと抱きしめていました。）親から離れて幼稚園に来ることは、どの子にとっても不安な気持ちがあります。そこで、安心して園生活が過ごせるようにかかわることが最も大切

…と偉そうなことを書きましたが、まだまだ若輩者です。様々な先生方の教育実践、様々な学校の取り組みから、たくさんのことを学びたいと思っています。皆さま、どうぞよろしく願いいたします。

## まえだ しおり（福井佼成幼稚園）

だと感じています。今年度は、5歳児担任ということで、子ども達の心の動きをきめ細やかに受け止め、気持ちに寄り添いながら、小学校就学までの大切な一年間を保育していきたいと思っています。

自園は若手の職員が多く、私自身も若手保育者の一人です。まだまだ経験不足ではありますが、園内では中堅の一人として、自分より若手の職員を支えていくという立場にあります。自園の保育の質を高めていくためにも、園を代表して学ぶつもりでいます。このような、“大学”という場で勉強することは初めてで、普段子ども達と活発に走り回っている私にとっては、ベテランばかりの環境に緊張しておりますが、学ぶ場を与えてくれた園と応援してくれる園の仲間感謝し、頑張っていきたいと思っています。子ども達の健全な成長のためにはどのような経験や活動が必要なのか、現場の抱えている課題を大学院の先生方と学び、学んだことを自園の他の職員にも発信していきたいです。幼保小連携を考えていく上でも、小学校に勤務している先生方には、幼児期にしておいた方がよい経験、身に付けておくべき態度などをアドバイスいただけたら、そのまま園に持ち帰り、生かしていきたいと思っています。経験は浅いながら、子どもの年齢に近い若手だからこそ感じることのできる疑問や考えをどんどん発信していきたい、保育の質の向上に努めていきたいです。未熟なあまり、皆様にご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、精一杯頑張りますのでよろしくお願い致します。



## 横澤 朋 よこざわ とも

(カリタス学園・カリタス幼稚園)

今年度、教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学した横澤朋です。出身は岩手県で、関東に出て来てから長いのですが、東日本大震災の前後3年間は岩手にいたので、様々な経験をし、いろいろなことを考えさせられました。現在は、神奈川県川崎市にあるカリタス学園・カリタス幼稚園に勤務しています。カリタス幼稚園はカトリックの幼稚園で、モンテッソーリ教育というイタリアで生まれた教育を行っている園です。卒園児の多くは、カリタス小学校に進学しています。以前勤めていた幼稚園で、モンテッソーリ教育を学んだり資格取得のためイタリアに留学したりしました。当初は小学校の教員をめざしていましたが、小学校入学前の幼児期の教育に興味を持つようになり、幼稚園の教員として子ども達と日々関わっています。保育の中で特に好きなことは音楽活動です。毎年、クリスマス会で年長児がイエス様ご降誕を表現し『聖劇』をするのですが、聖劇につながるよう年少児の『天地創造』（歌と踊り）と年中児の『ノアのはこぶね』（合奏）を作った経験があります。小さな頃から素晴らしい曲を耳にし、本物の楽器に触れる機会を大切にしました。歌や楽器の演奏を通して、子ども達が「音楽って楽しい」と、少しでも感じてくれたら嬉しいと思っています。

出会い、様々な発見をしていく姿を間近に見る毎日です。幼い子ども達が豊かな経験を重ね成長していくために、その環境や出来事と子ども達をつなぐ大人の役割は重要だと考えています。自分の身体や五感を使って実体験をし、生きる力や人との関わりを身に着けることを大切にしたいと思っています。幼児期の記憶や思い出は成長と共に薄れていくかもしれませんが、保護者や家庭から離れ初めて集団生活をする子ども達が、これからの人生の基礎や土台を築いていく最初の時期に携わることができることを幸せに感じています。幼い子ども達でも、大人が想像する以上に素晴らしい力を持っているということを実感し、一人ひとりの可能性を引き出す保育をめざしています。カリタス幼稚園でも、一人ひとりに寄り添い、子ども達が生き生きと活動に取り組めるよう、保育の流れを検討したり教員が学びを深めるため研修を始めたり、改革に着手したところです。幼稚園の保育と学校の教育とでは、相違点も多々あるかもしれませんが、教職大学院での学びを通して新しい視点を知り、子ども達にとってより良い保育を実現できるよう方法や園の在り方を模索したいと思っています。また、幼稚園生活で培ったことが、その先の小学校生活につながるものとなるよう、一貫校だからこそできることは何かを考え、取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

幼稚園では、生まれてからまだ3年～6年の小さな子ども達が、日々いろいろな体験と

# インターンシップ／週間カンファレンス報告

## はじめの一步

教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属小学校 山上 晃平

インターンシップが始まり、早くも1カ月が経つ。週3回、インターンシップに通い、本当に様々なことを学ばせて頂いている。日々、学びの連続で非常に充実しており、あっという間の1カ月間だったように感じた。それと同時に、インターンの生活に慣れるので必死だった。正直、この1カ月自分がどのように動いていくか、どのような志でインターンに取り組むのかなど具体的な目標が無く過ごしてきた。この1カ月の中で、私が入っている5年生の2人の先生とお話できた日がある。その日のお話が私の中でとても印象的に残っている。中でも、この1カ月目標無く過ごしてきた私にとって印象深く残っているのは、「何か目標がないまま過ごしていると、大学院を卒業した後に何も残らない。失敗してもいいから実際に行動してみて、振り返って、もう一度やってみるといふ繰り返しが大切」という言葉である。私は何を学びにこの大学院に入ったのかを今一度考え、日々を過ごしていく必要があると感じさせられた。そして、「子どもを理解することがこれから授業をする上でも、関わりを深めていく上でも大切」だという事も言って頂いた。この1カ月、子どもを見てきたつもりだが、まだまだわからないこともたくさんある。だから、私はこれから「子どもを見取る、理解する」とはどのような事なのかという事をテーマに日々を過ごしていきたい。まだ、私自身子どもの見とりが甘いと先生との話を通して感じた。だから、日々子どもたちと過ごしていく中で小さな気付きから、常に子どもたちの行動、発言に対して「どうして」と疑問を持ち、考えてみることから始めていきたいと考える。そして、そういったことをメンタ

一の先生や同じインターン生と話すことで自分の子どもに対する理解というものを深めていきたいと思えるようになった1カ月間であった。

そして、週1回行われる木曜カンファレンスも始まった。このカンファレンスは午前、午後それぞれ2部ずつの4部構成となっている。午前1の時間では日々のインターンで生じた良かった事や悩みなどの出来事を共有し、そのことについて皆で議論することで、その時の自分の対応や考えについて振り返ることで、改めて自分の実践について考え直すことが出来る。午前2の時間では、インターンに行くにあたって、今の自分たちに何ができるのか、今後どのように参加していくのかを考えていった。ここでは、自分を見つめ直すことが出来たり、インターン生としての自覚をもう一度確かめたりすることが出来たように思う。午後1の時間では大学生版PISAの作成を通して、教育改革の変遷を読み解くという事を行った。資料を吟味し、これから身に付けなければならない力とはどのようなものか、そのためにどういった教育が必要になってくるのかを読み取り、自分たちがどうあるべきかを探っていった。午後2の時間は授業作りを行った。それぞれが持ち寄った単元についての教材研究を行い、授業を作っていく。子どもにとって分かりやすい、面白いと思える授業は何なのかをグループで試行錯誤しながら授業を練り上げていく。実際に授業をすることは困難だが、教材研究を行うことでその単元のねらいや単元構成等が見えてくるので非常に有意義なものだった。このように午前中は主にインターンシ

ップについて、午後はインターンから少し離れて、教育全般について考えている。

教職大学院に入ってから最初の1カ月間、インターンシップや木曜カンファレンスなど何もかもが初めてで、戸惑いも多い中で日々過ごしてきた。しかしながら、日々過ごしていく中でたくさんの人と関わり、議論を重ね、学びを少しではあるが深めることが出

来たように思う。これから先、もっとたくさんのお会いがあり、様々な議論を行っていくことになるだろう。そして、辛いことや悩みも生じてくるだろう。しかし、この出会いや話し合いの場を大切に、皆で語り合うことで、これからの大きな成長につなげていければいいと思える1カ月間であった。

## 弱さも「教師らしさ」。焦らず。

教職専門性開発コース 1年/福井市中藤小学校 佐藤琢磨

「『教師らしさ』とは何なのだろうか。」

私が4月合同カンファレンスの2日間考え続けた問いである。きっとこれから3年間、いや現場に出てもこの問いが私から離れることはないであろう。なぜなら私ほど教師にふさわしくない人間はいないと確信しているからである。

私は「弱い」人間でありそれが恥ずかしくて仕方が無かった。私はよくお腹がぼっちゃりとして「立派」であること、年に似合わず「老け顔ですね」ということを色々な人に言われる。水泳をはじめ体育が苦手でピアノもできない。中学校の時はよく0点をとって先生に叱られていた。論理的に甘いところもあり、叱ることや褒めることも苦手だ……。

そんな私が参加した最初の合同カンファレンスは、刺激と学びにあふれ、「弱さも『教師らしさ』になるのだ」という気付きへとつながる時間になった。

初日は同じグループであった先生方と「教師としての型」について話し合った。国立中等教育学校で自由な校風を大切にされてい

る塩川先生からは「型に捉えることで子ども達も不自然さを感じ、教師と子どものかかわり合いの中に違和感が生まれる」という言葉を頂き、生徒指導主事経験のある齋藤先生からは「型があることで子どもの状態への気づき生まれる」という言葉を頂いた。どちらも豊かな経験に裏打ちされた言葉であり「教師らしさ」とは何なのか深く考えるきっかけとなった。

2日目はメンター（インターンシップ先でお世話になる指導教員のような先生）である高間恵美先生の長期実践報告『教師の協働による学校づくり』を自分の経験と照らし合わせながら読んだ。同僚の先生方や子どもたち、その保護者の方から慕われ、信頼されている高間先生を見て、私は心のどこかで「先生には教師としての天性の才能があり完璧なのだ」と思っていた。しかし高間先生の実践報告の中には自分自身を見つめ直し、失敗や課題も含めて厳しく実践を問い直す姿が生々しく描かれていた。

「教師らしさ」とは単に褒めたり叱ったりする技術が上手いことを指すのでもなけれ

ば、授業や学級経営の巧みさや深い子ども理解ができることだけを指すのではない。「教師は五者たれ」という言葉にあるように教師には様々な顔がある。合同カンファレンスでの学びをふり返って言い直せば、どの顔を持ち、深めようとも教師なのである。先輩である高橋院生の言葉を借りれば「自分らしさが教師らしさになる」のであり、だからこそ多様な教師が「協働」して実践を展開していく必要があるのだ。

私は子どもたちからよくお腹をぶにぶにと触られ「先生のお腹すごい！」とよく言われる。それは「教師らしさ」なのだろうか。その答えはこれから探していくことになるが、それは自分の「弱さ」と同時に自身の教師としての特徴でもある。

この教職大学院において受け身であることは「罪」であるということ私は念頭に置きたい。問題意識なくして教師としての成長は有り得ず、教師としての成長なくして子どもの成長は有り得ないのだから。色々な方にご指摘いただいたが、焦って「自分」を確立しようとする自分の成長は止まる。焦らず着実に問い直しを始めていきたい。

最後に、未熟な私を温かく受け入れて下さり中身の濃い時間を過ごさせていただいたことに感謝し、同じグループのメンバーの輪に入れて下さった全ての先生方に感謝いたします。本当にありがとうございました。

## New Start !

### 教職専門性開発コース2年/福井市至民中学校 松山 琴美

新年度が始まり1ヶ月が経過した。今まで先輩方が手探りながらも運営されてきた木曜カンファレンス(以下木カン)を自分たちが受け継ぎ企画運営していくときがきたのである。1年間先輩方が遅くまで大学に残って会議し、内容を決めている姿を見てきて、先輩たちと同じように出来るのだろうかという不安と先輩たちのときよりも木カンを良くしていきたいという思いがあった。ここでは、木カンの具体的な内容とその中で私たちが挑戦している改革について書いていきたい。

木カンとは、毎週木曜日にストレートの院生(以下SM)が集まりカンファレンスを行うことである。午前の部と午後の部に分かれているが、いずれも各々が日々のインターン

シップでの経験や実践、考えたことを共有し、省察することで意味づけ価値づけていくという有意義な時間である。午前の部は1週間のインターンシップでの経験を振り返り意味づけする「学びの振り返り」と月ごとに主担当の院生が企画運営する「主担当企画」の2部構成になっている。4月はM2全員で企画を行った。事前に行った企画会議では、新年度になり今までの自分を振り返り、これからの1年あるいは教員として踏み出したときにどういう教員に成長していきたいか、何を大切にしていきたいかという構想を立てたいといった内容の意見が出た。そこで、4月の主担当企画のテーマは「Start Line ―〇〇のために何が出来るのだろうか―」に決定した。1週目は自分という視点で自己マッピング

をし、今まで自分はここに至るまでにどのように歩んできたのかを語り合い振り返っていった。2週目は学校に視点を変え、M2がそれぞれ昨年1年間インターンシップに行っている学校のためにどのような実践を行ってきたのかを報告し、それぞれが今後学校のために何ができるのかを語り合っていた。3週目はエゴグラムという質問紙法による性格診断を実施し、その結果を参考に自分の性格を踏まえて子どもたちのために何ができるのかを語り合った。以上を踏まえて4週目は1年間の構想を自由に図示していった。

過去を振り返ることは、成功体験だけでなく、失敗体験も一緒に振り返ることになるのでなかなか精神的には苦痛な作業である。しかし、当時は分からなかった失敗の要因や、自分が今後成長できそうな伸びしろを見つけてきたように思う。振り返ってみると、昨年も同様に1年間の目標を立てていたが、インターンシップで壁にぶつかり、目標が分からなくなって悩むたびに4月に立てた目標（構想）を確かめていた自分の姿があった。今回新たに立てた構想は、昨年度のものよりもより具体的なもので段階を踏まえて考えることができたと思う。思うだけで終わってしまうのではなく、この先に実行していきたい。自身の成長を目指していきたい。

次に午後の部について紹介していく。午後の部は「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究」の2部構成である。昨年度と変更した点は午後の部である。昨年のことも踏まえ順を追って説明していく。前半の「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」では、現在の公教育での動向を、答申などを読みながら探究していくものである。昨年度はテーマごとに答申や先輩方が選択してくださった資料を読み、読み取ったことを語りながら深めていくというスタイルだった。（私にとっては）なかなか読んで語る

だけでは十分な理解を得ることは難しく学びの実感が薄かったように思う。今年度からは「学習指導要領」「生徒指導・道徳」「地域学校連携・教師教育」のテーマで、4週を1cycleとして大学院生版PISA問題を作成・解答・評価することを通して1つずつ深めていくことになった。これが1つ目の挑戦である。問題を作成・評価するためには、作成者がしっかりと資料の内容を熟知していなければならない。私たちM2は昨年度の経験から答えのない問題に挑む意義は言葉では言いづらいが感覚的に分かっている。経験が少ないM1にその意義や資料を選定した意図を分かりやすく伝えていくのか、活動の度に頭を悩ませることである。今月は試行錯誤している間に終わってしまったが、テーマは違えど来月も同じような順序でcycleがあるので今月よりもっと良い形でM1に提示できればと思っている。

後半の「授業改革・カリキュラムマネジメント」では、アクティブ・ラーニングを取り入れた単元構想を行っている。ここには、ひとつの単元にじっくりと向き合える時間がある院生の今だからこそ、教科書の比較検討や学習指導要領、また様々な実践記録を読み込み、深みのある単元構想を作成してみようという意図がある。昨年度は、同じ専門教科の院生が集まって先生方も交えて、それぞれが作成している単元構想について意見交換しながら単元構想を練り上げていった。しかし、教科を超えた授業づくりに挑戦したいという思いから今回は、小学校、中学校、特別支援学校の3つのグループに分かれて1人の提案する授業をグループで協働し練り上げていった。これが2つ目の挑戦である。小学校とは違い中学校では、専門教科が違うためグループで作成した単元構想すべてが自分で実践できるわけではない。違う教科の院生と授業をつくるという点で内心戸惑っているM1が多いと思う。しかし、知っている同じ専門の人からは絶対に話題に上がらないであろう疑問や違う専門教科の視点か

らでしか分からないアプローチの仕方など自分が見えていなかった視点が次々出てくるので、より深い部分まで気を配って単元構想をつくることができるのである。

M2の中で意見が一致しないことや分からないことばかりで頭がいっぱいになることもあるが、それ以上に仲間と協働し、自分たちで企画運営していく木カンにやりがい

感じている。始めたばかりで至らない部分が多く、改善点も多いと思う。けれども、真っ直ぐについてきてくれ意見も言ってくれるM1, なにより私たちを信用してサポートして下さる大学院の先生方に感謝し、試行錯誤しながらも昨年よりも“シンカ”した木曜カンファレンスを創り続けていきたい。

## 4月 合同カンファレンスに参加して

### ブーメラン記念日

教職専門性開発コース2年/福井大学教育地域科学部附属小学校 池田文明

「池田君は自分の殻をまだ破れていないんじゃない？」

すべてはこの一言で始まった。言っただしたのは、A先生。この言葉は、自分がこれまで生きて来て、少なくとも大学を卒業してから、一番衝撃を受けた言葉だ。

言われた経緯としては、至極当然の理由に思える。1日目の「三つの種」「論点整理」、そして実践報告を読んだ感想をメモにして述べる時、なんだかんだと自分に言い訳をつけて、「去年のフォーマットに倣ってれば何も言われまい」と知らず知らずのうちに手抜きすることばかり考え、実行していた。同じテーブルには、私の発表に頻繁に食いついて来るK先生がいたので、正直「あんまり突っ込まれたくないなあ」と思っていた。実際にテーブルが始まると、運良く私は一番最後の発表となり、残り時間が20分たらずであった。ラッキーと思い、予め作っておいた無

難なA4の紙一枚であらすじと学びを発表した。「共感した」「すごいと思った」「これからの学びにつなげたい」などと無難な言葉を並べた。しかし芯の部分では、「しっかり読んでないし、社会人経験の面で自分とは違う」と思っていた。K先生は「これ少ない？」と指摘するが、私はそれに対して、「わざとです。これから口で説明します」などと答え、著者の転機となる出来事にさも感動したかのようにもっと口を動かした。自分が説明しているとき、テーブルの皆さんは聞いてくれていたが、つまらなそうな顔をしているように見えた。自分でも「つまらないんだろうな」と思いながらも、時間を埋める為に長々と説明していた。そして一連の私の喋りが終わった後に、A先生が私の目を見て一言仰った。それがこの一言だった。

この一言で、私は下を向き、腕を組み、うーんと唸ってしまった。むしろ唸ることしか

できなかった。そしてなぜか涙が出そうになった。A先生は「そんな深く捉えないで。他の人を鏡にして自分の姿を映して、そこからまた成長してほしいと思って。ごめんね。」と言った。しかし自分の中では「謝らなきゃいけないのは自分の方だ！」と心中叫んでいた。自分の殻と、その中身が何か。答えはな

かなかでない。しかし間違いなく言えることは、自分を守るそれとはなにかを、過去まで遡り今一度振り返りたいと思ったこと。過去を自分の「今」に戻さないと成長出来ないと本気で思った。A先生のおかげである。よって2016年4月17日をブーメラン記念日と制定し、今もその思考の中に居る。

## スクールリーダー養成コース2年/県幼児教育支援センター 観 寿子

4月15日・16日と4月の合同カンファレンスが行われた。1年目の4月を思い出しつつ、いよいよ2年目がスタートしたという実感が湧いてきた。2日間で3回異なるグループで話し合う時間があったが、「誰から話しますか。」というファシリテーターの先生の言葉に、昨年度、2年生の先生が「2年目なので自分から話します。」と言って話し始めてくださっていたこと思い出した。何をどう話したらよいか不安だった1年目の4月、2年生の先生にリードしていただきながら学んでいたのだと改めて感じた。今年は、自分がその番である。

カンファレンスでは、①実践的な自己紹介、②教育改革の動向と方向性について示した最新の資料を読んで自校の実践の捉え直し、③長期実践研究報告を読んで自身の実践の考察、④自分の実践紹介と、大きく4つの内容が行われた。

①の自己紹介で私は、大学院で職種・立場、在住する場所が違う多様な方と話しをする機会があったこと、自分の職場での実践のことの二つの大きな柱で話した。これを話し終わった時、「観先生のしていることが、とてもよく分かりました。1年間、多様な人に話をしてきたからでしょう。」という言葉がい

ただいた。人と話す中で、私は自分の考えや経験を整理してきたのだと感じた。

②では、27.8.26に出た「教育課程特別部会 論点整理」と26.3.31に出た「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—について」を読み、③では、2005年から2016年の約10年間の長期実践研究報告書から幼児教育・生活科・総合に関わる幼稚園から高校までの先生方の4冊の報告書を読んだ。②③の報告をしたグループは同じで、そこで「観先生は、長期的な視点で物事を考えようとしているんですね。」という言葉をいただいた。自分は、そういう視点で物事を考えているのだと気付かせていただいた。

④の自分の実践では、担当して3年目になる「保幼小接続事業」のことを中心に話した。この仕事を担当するようになり、幼児教育と小学校教育で何を接続することが大切なのかということが常に考えている。教科の区別がない幼児教育と教科等の区別がある小学校教育。平成26年度の「保幼小接続カリキュラム」作成時からずっと、カリキュラムの柱の「学びに向かう力」という非認知能力や社会情動的スキルと呼ばれる力に着目してきた。これは、これからの教育の方向性とも合致し、次期指導要領のベースとなる「資



質・能力（コンピテンシー）」とも大きく関わっている。しかし、園・学校の先生方や保護者とこのような「新しい教育課程が目指す理念の共有（論点整理 27.8.26 p25）」を進めることの困難さがあると感じる。

実際自分自身も小学校に勤務していた時、目の前の子どもとの1時間、1日、1単元、1学期、1学年という視点や各教科だけの視点で考えることが多かったと思う。しかし、子どもは、1年で育ち終わるのでなく、また、社会に出たら教科の枠はない。目の前の子どもは、これまでどのような育ちをしてきてこれからどう育っていくのか。その見通しをもって日々の授業をすることが、より子どもの力を発揮させ伸ばすための鍵だと強く思うようになった。鳴門教育大学の村川雅弘教授は「アクティブ・ラーニングについては、授業の方法や授業形態の改善だと考えられがちです。しかし、学校で学んでいる間はもちろん、社会に出た後にも、どのような課題に出会ったとしても決してひるむことなくあきらめずに課題と向き合い、その解決に向け

て多様な他者と協働していく、また新たな課題について学び続けられる人の育成をめざすもので、学び方というより生き方なのだ」（総合教育技術 H28.4月号）と書かれていたが、変化の激しいこれからの社会を生きていく子ども達や自分が、こんな生き方を意識し実践できるようにしたいと思う。

④で実践について話し合った、認定こども園の副園長先生や小浜市の小学校の先生から、それぞれの園や学校、市の熱い取り組みをお聞きして、現場で「子ども主体の学びを大事にしようとする理念」が共有されてきているとも感じた。ある先生、ある園や学校、ある市町のよりよい取組を広げつなげていく場や仕組み作りも、県の行政だからできることではないか。今年度の実践を進める方向性が見えてきたカンファレンスとなった。毎月たくさんの気づきをいただく場があることに感謝して、今年度も実践し学んでいきたい。もちろん、書くことも進めなくては、2年目。

# 平成 28 年度 教員免許更新講習について

平成 21 年 4 月に始まった教員免許更新制において、教育職員免許法第 9 条の 3 に基づき開設された教員免許状更新講習は、今年度で 8 年目を迎えます。教員養成系学部を有する大学には、この制度の目的である最新の知識技能の修得の場としてのミッションを果たすことに関して、大きな期待が寄せられています。

本学におきましても、受講者の先生方に満足いただけるよう、毎年度いずれの分野・領域でも、創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきております。特に、必修領域（教育実践と教育改革 I①②）を担当する教職大学院では、「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ—実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る—」をキーコンセプトに、専門職として探究し合う新しい方法を採用入れた講習を実施しており、プログラムの特色として次の点を強調しております。

**教職大学院の教師教育のノウハウを生かして、「実践・省察」を視した講習にしていること**

**少人数による話し合いを基本とし、そのグループ構成は講習、年齢、地域、教科等の枠組みを解いたものになっていること**

**必修領域 12 時間に、選択である「教育実践と教育改革Ⅲ」6 時間を加えて、連続 3 日間の計 18 時間で一括りとする講習を提供していること**

1 日目は、受講者が作成した自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まります。実践の経験を交流し課題意識を共有するため、グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行います。その後、国の施策や世界の動向、子どもの発達についての最新知見を学び、午後からはグループ内で、今後の実践に向けての展望を考えながら、多くの優れた実践事例資料を読み深めていきます。2 日目は、3 コース（「授業づくり」「子どもの発達支援」「組織的な学校づくり」）に分かれ、国の動向や学校を巡る近年の変化を学びつつ、テーマと関連する 1 つの実践事例を取り上げて考察したことを各自レポートにまとめます。その後、各コース・年代・校種を交えた新たなメンバーで構成されるクロスセッションの中で報告会を行います。3 日目は、教師としての自分の歩みを振り返り今後の展望を拓く目的で、自身の教育実践レポートの作成に取り組み、その後、クロスセッションを通して省察を深めるという流れになっています。

レポート作成や報告に必要な時間の確保、優れた最新の実践事例資料の収集、ファシリテーションのスキル向上等、解決すべき課題は少なくありません。しかしながら、事後評価アンケートから垣間見える受講者のニーズや要望に沿うように、また、講習内容を実際の教育現場で大いに活かすことができるように、絶えず改善を重ねてきたつもりです。今後とも、一層充実した講習にするため、細心の注意を払いながら丁寧な運営を心がけていきたいと考えております。講習の詳細については、以下のとおりです。

## 対象の職種

教諭および養護教諭

## 講習名

教育実践と教育改革 I（教育の最新事情①）・・・必修講習部分（1 日間）

教育実践と教育改革 II（教育の最新事情②）・・・選択必修講習部分（1 日間）

教育実践と教育改革 III（教育の最新事情③）・・・選択講習部分（1 日間）

日程・会場

※3日間とも 9:00～16:20

- ①平成 28 年 7 月 21 日（木） 7 月 22 日（金） 7 月 23 日（土） 3日間とも福井県自治会館
- ②平成 28 年 7 月 27 日（水） 7 月 28 日（木） 7 月 29 日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス
- ③平成 28 年 8 月 3 日（水） 8 月 4 日（木） 8 月 5 日（金） 3日間ともプラザ萬象（敦賀市）
- ④平成 28 年 8 月 17 日（水） 8 月 18 日（木） 8 月 19 日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス
- ⑤平成 28 年 12 月 26 日（月） 12 月 27 日（火） 12 月 28 日（水） 3日間とも福井大学文京キャンパス

（小杉 真一郎）

## ◆研究紀要・実践報告書紹介◆

### 多様な背景の人々が垣根を越えて省察し実践するコミュニティをつくる

平成 28 年3月 福井県幼児教育支援センター

「幼児教育研修システムの構築『学びをつなぐ 希望のバトン プロジェクト』

～県・市町・大学の連携による市町幼児教育アドバイザー・園内リーダーの育成～

（平成 27 年度文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等構築モデル調査研究」報告書）

福井県幼児教育支援センターは、幼児教育及び乳幼児期の家庭教育に関わる様々な事業を行い、幼児教育の仕組みを進化させることを目的に、2012 年 11 月に福井県教育委員会に設置されました。センターでは、保育所・幼稚園・認定こども園と小学校との間で子どもの育ちを接続する核として「学びに向かう力の育成」を提示し、「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム」を作成して、ねらいと方向性を明確化してきました。そんな中、幼児教育の質をさらに向上させていくため、2015 年度から新たな研修を始めました。本書はその研修の報告書です。

多くの都道府県ではこれまで、管轄が異なることもあって保育所と幼稚園は別々に研修が行われることが多く、さらにそれぞれに公立と私立があるため、それらを統括する自

治体や団体でそれぞれに研修が行われてきた現実があります。福井県ではこのような保育所・幼稚園・認定こども園、公立・私立の垣根を越えて、各園のリーダーとなる保育者の養成と、各市町でアドバイザー役となる市町幼児教育アドバイザーの養成を県として始めました。

初年度は、さまざまな市町から園種の枠を越えて、園内リーダー研修には約 150 名が、市町幼児教育アドバイザー研修には約 30 名が受講しました。研修は、年間 5 回程度継続



的に行われ、「遊びの中の学び」に焦点を当てて、事例を検討しあうことを中核にしました。園内リーダーは各園から持ち寄った遊びの事例をもとに語り合う中で、そこにどんな学びがあったのかを捉え直し、次の実践につないでいきました。市町幼児教育アドバイザーはそこでファシリテーターとしての力量形成を行うと共に、市町幼児教育アドバイザー同士で市町ごとに園内リーダーのいる園を訪問したり、市町の幼児教育のあり方を示すポスターを作成したりし、目指す理念と方法を共有していきました。

このような研修を通して、市町幼児教育アドバイザーが中心となる各市町の幼児教育を支えるコミュニティのもと、市町も園種の枠も越えた園内リーダーのコミュニティが活性化し、各園で実践を振り返り捉え直すコミュニティの質の向上に結びついていったのではないかと思います。この報告書には、

こうした研修の構造とポイントが整理されています。

多様な背景を持つ人々が「子どもの育ちや学び」といった共通点を切り口に垣根を越え、互いに省察し実践するコミュニティをつくり、ひろげ、質を高めていくにはどうしたらいいか、幼児教育の分野に限らず様々な場で研修をデザインするヒントに満ちていると思います。なお報告書はWEB上で公開されています。ぜひダウンロードし参考にしてください。

掲載ウェブサイト：

<http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gimu/youjikyoku/youjikyoku.html>

(岸野麻衣)

## 学びと生活の向上一規範・学力・有用感の向上を目指して

新緑の表紙をひらくと、冒頭で小倉浩一郎校長がこのように述べています。「本校が目指す教育改革はまだ道半ば」であり、「戦後の教育改革から70年という長い歴史を考えると、パラダイムシフトはそう容易なものではない」と。福井市至民中学校は現在の教育改革のなかにおいて「生徒の実態に応じたしなやかな舵取り」を行いながら「シンカ」し続けています。そして、その「シンカ」は本実践記録におさめられている教職員と院生による一人一人の丁寧で真剣な実践記録によって跡づけられています。

本実践記録は、「Ⅰ 学校運営」、「Ⅱ 研究部」、「Ⅲ 各研究部会の取組」、「Ⅳ 教科指導」、「Ⅴ 特別支援教育」、「Ⅵ 学年経営」、「Ⅶ 学級経営」、「Ⅷ 様々な取組」、

### 福井市至民中学校(平成28年3月)

「Ⅸ 様々な支援」、「Ⅹ 教職大学院との協働研究」、「Ⅺ 資料」から成ります。そこには、実践者である先生方の日々の

チャレンジとその積み重ね—その時々での判断、躓き、気づき、そして再チャレンジの苦闘の過程—が表現されています。拝読するとその実践が同僚や子どもたち、保護者、地域の方々との双方向の信頼や感謝にもとづく「かかわり」のなかで編まれていることに気づきます。至民中の実践記録には実にあまた



の「人」が出てきます。その意味で、本実践記録はまさに学校・保護者・地域が協働し学び合う「実践コミュニティ」づくりの記録であるとも言えます。

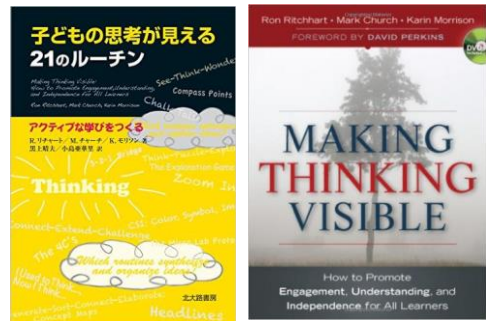
2015年度は桜（の表紙）で、2016年度は新緑となりました。みなさんも本実践記録を手にとり、至民中の「シンカ」の過程にぜひ同行していただければと思います。

（半原芳子）

## ◆◆書籍紹介◆◆

思考を可視化することによって学習者の能動参加を促し、理解を深めるディープ・ラーニング型の授業を目指す全ての教師、教育者の必読本。思考とは何かから始まり、ひと、もの、こととの対話を通して考えを導入し、展開し、掘り下げるため21のルーチンを実践的に紹介している。例えば、「見る・思う・ひっかかる」「つなげる・広げる・吟味する」「主張する・根拠を述べる・疑問を出す」「文で言う・フレーズで言う・単語で言う」などのルーチンである。そして、「どうしてそう言えるの?」と批判的に聴くことや、質の高い振り返りを記述しながらリフレクティブに学ぶこと、そして「教師が求める正解を言うことより、考えることが大切にされる教室文化」を構築すること大切さ我々に教えてくれる。

多重知性理論に基づく深い理解のための教育を長年にわたり大学と現場の教員がコラボするアクションリサーチに基づいて追求してきたハーバード教育大学院「プロジェクト・ゼロ」による確かな歩みの一端を垣間見ることのできる名著『Make Thinking Visible』（DVD 付き）の北大路書房が出版した翻訳本（DVD 省略）。



原本『Make Thinking Visible』の著者  
Ron Ritchhart : Ed.D. is a senior researcher at Project Zero, Harvard Graduate School of Education. He is the author of Intellectual Character from Jossey-Bass.

Mark Church : the Learning, Assessment, and Instructional Resource Supervisor for the Traverse City Area Public Schools in Michigan.

Karin Morrison : director of The Development Centre at Independent Schools Victoria, Australia and instructor for the WIDE World online course, Making Thinking Visible, at Harvard.

（小林 和雄）



## 6/2 福井大学教育学部附属中学校 第51回教育研究集会 プレセッション

福井大学教職大学院  
福井大学教育学部附属中学校  
第51回教育研究集会 プレセッション  
シリーズ・専門職として学び合う教師のコミュニティ  
ーその編成と展開ー その3

# 附属中学校のカリキュラム・デザインと カリキュラム開発のための組織学習

アクティブ・ラーニングと学校拠点のカリキュラム・マネジメントⅡ



福井大学教職大学院  
福井大学教育学部附属中学校  
教育研究集会プレセッション実行委員会  
代表 柳沢 昌一

教育改革の展開の中で、アクティブ・ラーニングとチーム学校が重要な基軸として提起されてきています。受動的な学習が支配的な現状をどう主体的・協働的な学習へと転換していけるのか、学校での総体としてのカリキュラム・マネジメントとそのための教師の協働研究が求められています。

附属中学校では自主・協働を学校の理念として掲げ、一貫して主体的で協働的な学習とそのためのカリキュラム開発を積み重ねてきました。今回のプレセッションでは、附属中学校における主体的・協働的な学習のためのカリキュラム・デザイン、教科を超えたカリキュラム開発とそのマネジメント、そしてその基盤となる教師の協働研究の編成について共有します。

長期にわたって附属中の実践研究に関わってきた福井大学教職大学院の協働研究者による報告とそれをふまえた少人数のセッションでの探究を進めます。また互いの取り組みを紹介しあう時間も取ります。

学校における協働研究の主任等、研究を支える役割を担っている方  
教職大学院の担当者で、学校における協働研究を支える役割を果たそうとされている方  
ぜひ ご参加下さい。

### 6/2 17:30-18:50

会場：福井大学文京キャンパス 〒910-8507 福井県福井市文京3丁目9番1号  
福井大学総合研究棟V（教育系1号館）6階 コラボレーション・ホール（裏面に地図あり。）

#### 参考文献

福井大学教育地域科学部附属中学校研究会編『専門職として学び合う教師たち』  
（シリーズ 学びを拓く探究するコミュニティ>第8巻 エクシード, 2010）

参加希望の方は下記まで、メールをお送り下さい。「附中研究会プレセッション参加希望」と件名に明記して下さい。 [dpdfukui@yahoo.co.jp](mailto:dpdfukui@yahoo.co.jp)

なお、教職大学院のホームページのアドレスは <http://www.fu-edu.net/> です。

# 6/18 福井大学教育学部附属幼稚園 公開保育

**1 研究主題** つながり合って遊ぶ子どもたち

**2 期 日** 平成28年6月18日(土)

**3 会 場** 福井大学教育学部附属幼稚園

〒910-0015 福井市二の宮4丁目4番1号  
TEL 0776-22-6687

**4 日 程**

9:00 9:20 11:10 11:20 12:10 13:10 14:25 14:40 16:00 16:10

受付	公開保育 好きな遊び みんなの時間 時間前のひととき	休 憩 ・ 移 動	全 体 会	昼 食	学 年 別 分 科 会	休 憩	テ ー マ 別 分 科 会	閉 会
----	-------------------------------------	-----------------------	-------------	--------	----------------------------	--------	---------------------------------	--------

**5 内 容**

● 公開保育(9:20~11:10) 各保育室および園庭(雨天時 遊戯室)

● 全体会(11:20~12:10) 遊戯室

研究概要説明

ご高評(本日の保育について) 無藤 隆 先生

白梅学園大学子ども学部教授 同 大学院研究科長

文部科学省中央教育審議会教育課程部会委員

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議座長

● 学年別分科会(13:10~14:25)

学年	3歳児(すみれ・ゆき)	4歳児(ばら・もも)	5歳児(ほし・つき)
保育者	牧田 祐子 笹川 英理 (福井医療短期大学)	坂ノ上 忍 玉村 沙耶香 (福井市教育委員会)	青木 美恵 野路 尚美 (福井県教育庁義務教育課)
助言者	森 透 先生 (福井大学教育学部)	藤川 文枝 先生 (福井大学教育学部)	川崎 恵理 先生 (福井大学大学院教育学研究科)
	竹内 恵子 先生 (福井大学大学院教育学研究科)	濱口 由美 先生 (福井大学大学院教育学研究科)	松木 健一 先生 (福井大学大学院教育学研究科)
	荒木 良子 先生 (福井大学大学院教育学研究科)	岸野 麻衣 先生 (福井大学大学院教育学研究科)	稲井 智義 先生 (福井大学大学院教育学研究科)
協力者	水島 淳子 先生 (福井市森田栄保育園)	松山 幸代 先生 (花園幼稚園)	野嶋 智代 先生 (福井市立本郷幼稚園)
	森阪 香織 先生 (福井大学附属特別支援学校)	佐藤 恵美 先生 (福井大学附属中学校)	笈田 美香 先生 (福井大学附属小学校)

● テーマ別分科会(14:40~16:00)

A・B・C・Dの分科会に分かれて、それぞれのテーマから、「つながり合って遊ぶ」を考える

分科会A 「遊びから学びへ、学びから遊びへ ~次期幼稚園教育要領・保育所保育指針・学習指導要領の方向性について~」(仮) 無藤 隆 先生
分科会B 「つながり合いが生まれる運動遊び」(仮) 近藤 志津恵 先生 (幼児・児童体育教室「たけのこくらぶ」代表)
分科会C 「家庭とのつながり、保護者とのつながり」(仮) 竹内 恵子 先生
分科会D 「つながり合いが生まれる造形遊び」(仮) 濱口 由美 先生



## ■ ■ ■ おめでとうございます ■ ■ ■

岡部誠先生(東京都板橋区立赤塚第二中学校 主幹教諭, H24 年度修了生)

第 18 回「がんばれ先生！東京新聞教育賞」受賞！

受賞論文タイトル

### 教師が学び育つ学校創り

ー授業改善のビジョンを共有した協働的なコミュニティ形成と生徒の変容ー

#### 「参観」通じ 教員が学び共有

受け持ちの時間割が空いても、板橋区立赤塚第二中学校の先生は職員室にとどまらない。別の先生が授業をする教室のドアを開け、「授業参観」に励む。体育の先生が社会科の教室へ、社会科の先生が国語の教室へー。

生徒はいつ、先生のどんな言葉に反応して顔を上げたか。注目するのは、授業の技能ではなく、生徒一人一人のつぶやきやしぐさ。教壇の上で黒板に向かっては捉えられない細かな点を、互いにフィードバックする。

こうした「研究チーム」を三～四人でつくり、週に一度対話の場を持つ。経験年数や担当学年、教科はあえて統一せず、議論には上下関係もない。活動はまもなく四年目を迎える。

「生徒には仲間と知恵を育ててほしいと教えている。教員も同じです。生徒の反応というフィルターを通して、教員同士が学びを共有しているのです」

二〇一一年から二年間、担任を持ちながら休日に福井大大学院で学んだ成果を生かし、この仕組みを提案した。今では「面白い授業をやっているようだ」「気になる子がいる」など、先生たちが校舎を歩き回る環境が定着している。(皆川剛) 東京新聞ホームページより抜粋

岡部先生の受賞論文は下記の東京新聞ホームページにてご覧になれます

<http://www.tokyo-np.co.jp/event/kyoiku/>

【編集後記】インターンシップ、週間・月間(合同)カンファレンスも始まり、新たな1年が本格的にスタートしました。4月の合同カンファレンスは1年目の院生にとっては初めての合同カンファレンスであり、最初は緊張した面持ちも見られましたが、時がたつにつれ、どのグループでも話に熱を帯びていっている様子が感じられました。教職大学院としての実践がさらに豊かに彩られていくことを感じています。(笹原未来)

教職大学院 Newsletter **No.85**

2016.5.14 内報版発行

2016.5.30 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp